

高島依子さん●声楽家（ソプラノ）

歌が好き。皆でつくり上げるオペラが好き。

よく通るつややかな声。楽しそうにおしゃべりをし、よく笑う人。この人の歌を聴けば、きつと幸せな気持ちになれるに違いない——そんなDivia（歌姫）が同志社女子大学から誕生しました。もちろん美しい歌声の背景には地道に積み上げてきた努力があります。それを支えたのは、しなやかなチャレンジ精神。昨年はブッチー二のオペラで主役の座を射止め、今後の活躍がますます期待される歌姫に、これまでの道のりを伺いました。



たかしま よりこ
1972年京都市生まれ。94年同志社女子大学音楽学科声楽専攻卒業、頤啓会特別専修生修了。2005年滋賀大学大学院教育学研究科声楽専攻修了。2000年イタリアへ渡り、キジアーナ国立音楽院で学んだ後、ミラノで研鑽を積む。01年M.フレニー女史マスタークラスでディプロマを取得。02年G.シモナート国際声楽コンクールで優勝した他、国際コンクール入賞多数。03年飯塚新人音楽コンクール声楽部門大賞および文部科学大臣奨励賞受賞。05年京都府文化賞奨励賞受賞。06年文化庁人材育成オペラ「修道女アンジェリカ」でアンジェリカ役を好演。現在オペラ、ミサ曲、第九などのソリストとして活動中。関西二期会、京都音楽家クラブ各会員。

同志社女子大学で出会ったオペラの魅力に惹かれてイタリアへ

——声楽は小さい頃から好きだったのですか。

高島 子どものころ児童合唱団に所属していて、舞台上に立たせていただくことがとても好きでした。中・高校もコーラス部。その時シスターに勧められて声楽の個人レッスンを始めたことが、この道に進んだきっかけです。音楽科への進学を考えたのは、最初は「好きだから、ちょっとやってみようかな」という程度の気持ちでした。同志社女子大学を選んだの

は、高校生の時から声楽の夏期講習に通った学校でもありましたし、キリスト教と西洋音楽はつながっていると思っていましたから。母も同志社で学んでいたので、私にとつては憧れの大学でした。同志社で出会った先生や友人は今でも大切な存在です。普段はなかなか会えませんが、「応援しているよ」と言ってくれる仲間がいつも感謝しています。音楽科の友人は今でも何らかの形で音楽とつながっていますので、同志という仲間意識が今でもあります。

——印象に残っている授業はありますか。

高島 3・4回生の時にオペラの授業を選択しまして、モーツアルトの「フィガロの結婚」のスザンナ役を歌い、そこで皆で舞台をつくり上げることや声楽の楽しさを知って、もつと勉強を続けたいと思うようになりました。それでもまだ、今のようになりませんでした。

——それがイタリアに留学された。どのような心境の変化があったのでしょうか。

高島 卒業後ノートルダム女学院の中・高校で音楽の専任教諭をしていまして、生徒に教えているうちに、また自分が学びたいという気持ちが強くなったんです

ね。そこで、オペラが生まれた国へ行けば何か違うものが見えるかもしれないと思っただけです。同女で受けたオペラの授業が非常に印象的だったものからです。本当にあつちへ行ったりこつちへ来たりで、ご縁のあるままに進んできたような感じです（笑）。

——気負いのない生き方ですね。同志社の卒業生らしい感じもいたします。

高島 そうなのかもしれません。私が私の欠点でもあると思います。歌は個性を表現するものだから、もつと「私が、私が」と自分を強く出せる性格の方がいいのかもしれないですね。

コンクール出場に燃えた留学時代、そして大学院を経て「表現すること」の大切さを知る

——留学時代のご様子をもう少しお聞かせください。

高島 イタリアではシエナのキジアーナ国立音楽院で学んだ後、ロータリー財団国際親善奨学生としてミラノで学びました。私はきつと歌うことを「学ぶ」のが好き、勉強が好きなんだと思います。勉強は自分との闘いですから。その結果を試すため、よい成績を残したくて向こうではあちらこちらのコンクールに出ました。それでも最初のいくつかはずつと2

位。ミスをしなない歌い方をするだけできつと人の心に届くものがなかったり、足りないことがたくさんあったのでしよう。最後の2つのコンクールは、偶然にも以前他のコンクールで伴奏してくださったピアノリストが弾いてくださったので、事前の練習も落ち着いてできて1位になったのだと思っています。「声楽は一人で練習できるからいいね」とおっしゃる方がおられますが、そんなことはないんですよ。私の表現を助けてくださるピアノリストをはじめ、常に多くの方々の支えが必要で、一人ではできないことがたくさんあります。

——イタリアでの生活はいかがでしたか。

高島 皆さんご存じのように大らかなお国柄ですので、音楽以外で格闘しないといけないこともたくさんありました。一度電車が遅れたためにコンクール開始に間に合わず、準備不足のまま歌わざるを得なかったことがあったんです。当然、一次予選で落選。それがもう悔しくて、以降は事前に宿を予約して、会場のある街には必ず前日の明るいうちに着いて現地を視察するという具合に、コンクール対策を必死でしました。いま思えば私の几帳面な性格が大爆発したんですね（笑）。会場には必ず一番に到着して、当

日のピアノリストと余裕をもつて合わせられる時間をつくるように心がけました。そういう努力があったからこそ、結果を出せたのだと思います。

——よい成績を残し、大きなものを得て帰国されました。

高島 ところが、あまり何も考えていなくて（笑）。帰国してすぐにリサイタルをさせていただいたのですが、その後「さあ、どうしよう」と思案しました。イタリアではコンクールで1位をいただき、各地で歌を発表する機会もたくさんありました。人との出会いもあつた。でも慣れない国で毎日勉強に追われて、ゆつくり考える時間はありませんでした。ああ、結局私は何も勉強していなかったなあと、思つて滋賀大学大学院の教育学研究科に進み、イタリアのベルカント唱法など発声法の勉強をしたんです。イタリアでミレッラ・フレニーという偉大なソプラノ歌手のマスタークラスを2週間受けたことがあつたのですが、そのときフレニー先生がこうおっしゃったんですね。「自分自身の声や発声について、もつと時間をかけて悩んでください。私も悩んだり迷ったりしてきたから、今でもこうして歌えているのよ」と。大学院での2年間は、じつくり悩み、研究するときに思つたと思います。

でも同時に、理論を並べてばかりではだめだということもよく分かりました。やはり外へ向かって歌で表現しないと何にもならない。2006年の春、これも神様のお導きだと思いますが、文化庁の人材育成オペラ「修道女アンジェリカ」のお話をいただき、これが自分にとって大きな転機になったのだと思います。

アクションを乗り越えて務めた舞台が教えてくれたこと

——タイトルロール（表題役）を歌われたのです。素晴らしいですね。

高島 実は稽古が始まってからも自分の力量について悩み、一時は降板しようかとまで思い詰めたんですよ。そんな気持ちには積み重なる稽古で少しずつ克服されていくのですが。でも今回、公演の1週間前、目の前の電車に乗れば少しでも早く稽古場に着けると思って階段を駆け下り、うっかり踏み外して転んでしまいました。その時は打ち身だと思って稽古場へ行きましたが、病院へ行ったら骨折と判明。その晩は舞台に立てないかもしれないことを思っ、足よりも目が腫れるくらい泣きました。その時、絶対に公演に出たい、声楽家としてやっていきたいと強く思っ、たんです。制作の方に事情をお話ししたら、「足を痛めた人がアンジ

ェリカを歌ってはいけない」と、作曲家ブッチーニは書いていない」とか「お客様に君のけがは関係ない」と言われまして。ああ、私に歌いなさいとおっしゃっているんだと。本番はテーピングに局部麻酔をして痛みを感じることなく、普通に歩き歌い終えたんです。ただ、そのとき、舞台に立てないなどと一時期でも思っ、た自分は本気じゃなかったんだなあと思いました。

——オペラで歌い、演じることの難しさは何でしょうか。

高島 アンジェリカは複雑な事情を抱えて修道院に入り、遠くに預けた子どもを亡くしてしまっ、役です。内容の深さ、表現の深さ、相手との距離感と、考えなければならぬことは山ほどあります。しかし考え込みすぎると声は出ません。子どもの死を知っ、て歌うアリアがあるのですが、本当なら我が子を亡くした悲しみの中で、歌なんて歌えるわけがありませんよね。そこで、泣いている自分からいったん離れ、自分を客観的に見ながら、きれいにアリアを歌わないといけない。一方で、やはり役になりきっていかないければアンジェリカの悲しみをお客様に伝えることはできません。非常に難しい役でした。このように自分で考えたことを、演出家や周囲の方々が膨らませてくださ

いました。本当に貴重な経験をさせていだ、たいたと思います。制作や技術の方々を含めて、私はこんなに多くの人に支えられて演奏するんだ、自分もプロのアーティストにならないと、こういう舞台には立てないんだと。現場で実践することの大切さを教えていただきました。この経験を通して、やつと演奏を続けていきたいと思えるようになりました。

——「修道女アンジェリカ」で新たなスタートを切られたのです。そして2006年11月には京都でリサイタルを開かれました。

高島 オペラとリサイタル、この2つを1年間に経験できたことは大きかったです。リサイタルはピアノとのシンブルな演奏のため、詞に込めるニュアンスによって全く違う曲になることもありますし、また曲の並べ方によって全体の印象も大きく変わってくるんです。私のプロとしてのキャリアは、2006年から始まったと言っ、ても過言ではないと思っ、ます。

たゆまぬ努力を重ね、また聴きたいと思っ、てもらえる歌い手に

——いま最も力を入れておられるのはどのようなジャンルの歌ですか。

高島 オペラです。奥の深いところが楽

しいですね。半年、1年前から稽古の積み重ねがあっ、て、初めて舞台ができ上がる。オーケストラで歌うのは、ピアノで歌うよりとても楽なんです。発声がきちんとしてい、れば、オケがどんな大音量になっ、ても、オケの壁を越えて声は客席に届きます。もう一つ、オペラは言語の壁を越えるところが素晴らしいです。正しい発声に加えて表情やニュアンスが伝わった時、つまり声が「音」として伝わった時、それは言語の壁を越えます。それが聴き手に伝わったことが分かった時の感動は大きいですよ。そうやっ、て、お客様がアーティストを育ててくださるんです。私は表現している時がいちばん楽しいです。

——リサイタルでは日本の歌曲もいくつか歌われました。オペラとの違いは何がありますか。

高島 歌曲は「詞」を伝えるもの。日本語の歌は、ある意味難しいんです。特に、皆さんがご存じのような歌は、聴く人が既に自分なりのイメージをもっ、ておられます。それを壊さないように歌わなくてはいいけません。今回のリサイタルでは、お年寄りのお客様から「また日本の歌をうたっ、てください」と言われて嬉しかったです。現在私は声楽の指導もしていますが、今の生徒さんたちが日本の歌曲

をあまり知らないことは残念に思っ、ています。これは音楽の授業が減っ、ている影響もあるのでしょうか。

——今後はどんなアーティストになりたっ、とお考えですか。

高島 私は目の前のことに必死になることしかできないのだと思っ、ます。学生気分が抜けないのか、生真面目に「いい時ばかりでないといけない」と思っ、いがちだったのですが、人生はいい時もあれば悪い時もある。両方を含めて聴き手の印象に残る人になりたい。特別に目立つようなことができる性格ではないと思っ、ますが、またこの人の歌を聴きたいと思っ、てもらえるような歌い手になりたいです。国内外を問わず、そういうさまざまな縁を大切にしながら歌っ、ていきたいです。——最後に、本誌を読ん、でくださる若い同志社人にメッセージをいただっ、けますか。

高島 挑戦してみないと何も始まらなっ、い、ということでしょうか。私もまだ将来像が定まらないでいますが、イタリアへ行かなかつ、たら経験できなかったことがたくさんありました。その前に、教師をしていなかつ、たら分からないこともあります。ただし、何でもかんでも挑戦してみて「だめだったらしいや」という気持ちではなく、責任をもっ、てチャレンジ

してほし。い。何かが生まれることを信じて挑戦していただっ、きたいです。以前、ある先生から言われた言葉が胸に残ります。「大人になっ、てから見る夢は努力すれば叶うんだよ」と。子どもの見るような遠方もない夢は別として、大人が現実の中で口に出せる夢には、努力次第で手が届くというのです。私も「歌いたい」という気持ちがあっ、つとあつ、たからこそ、いろいろな方の支えをいただっ、きながらここまで来られたのだと思っ、ています。

それから競争心も大切ですが、結局は自分との闘いだということ。イタリアにいた時、各地のコンクールで競い合う皆さんとは自然と顔見知りになっ、ていきましたが、誰かが失敗することを望み、私が1位になればいいな、などと思っ、たことはありませんでした。そんなことを考えながら挑戦したとしても、後で自分の心根が気持ち悪いだけ。今も当時の仲間とは連絡を取り合っ、い、刺激を与え合っ、ています。コンクールはライバルたちとの闘いではなく、先ずは自分との闘いなのです。そんなふうを考えられたのも、同志社で過ごさせていだ、だいたおかげだと思っ、います。

——本日はありがとうございました。今後のご活躍を心よりお祈りしています。（聞き手・當村まり、2006年11月15日大学「寒梅館」）

竹田武史さん●写真家

長江上流域に日本の原風景を求めて

竹田さんのレンズが捉えた風景は悠然としていて、時間の観念を忘れさせます。写真の中の人々は温かく力強く、そして雄弁です。約10年のあいだ竹田さんをとりにしてきた中国の大河・長江の魅力とは、そこで見た少数民族の暮らしに惹かれた理由とは、何だったのでしょうか。語学留学先の中国から一時帰国された竹田さんに、写真を通して人々に伝えたいことを伺いました。



ただけ たけし
1974年京都府生まれ。98年同志社大学神学部卒業。在学中に写真家を志し、井上隆雄氏に師事。97～01年日中共同研究プロジェクト「長江文明の探究」（国際日本文化研究センター主催）に記録カメラマンとして参画。01～04年長江全域の単独取材を行う。現在、日本、中国、アジアをフィールドに活動中。06年9月～12月は中国・雲南大学に語学留学。著書に『大長江～アジアの原風景を求めて』（光村推古書院）、『長江文明の探究』（共著、新思案社）がある。公式サイトは <http://www.eonet.ne.jp/~takeshitakeda/>

大自然と人間がつながる感覚に
宗教心を感じたオーストラリアの旅

——神学部ご出身の写真家とは、珍しいですね。写真の道を志された経緯をお聞かせください。

竹田 大学に入って1年目が終わる頃、自分の大学生活について考えるところがあったんです。僕はクリスチャンではありませんが、神学部に入ったのも「人間って何だろう、その人間の心を支え続けてきた宗教って何だろう」という原点を勉強したかったことが動機でしたが、周囲には大学入学以前からすでに特定の宗教に信仰を持ち、その信仰を基盤として聖書を読み宗教を考える学生が多かった

んです。彼らの学問に対する姿勢と自分のそれとを比べて、少々気後れを感じ、戸惑いました。宗教、あるいは信仰の原点を理解するためには、やはりもつと心で「感じる」ことから始めなければならぬ。ならば机の上の勉強からいったん離れて外の世界を見てみよう、自分も心で「感じる」ことをもつと体験してみよう。それで2回生を終えた時に休学し、オーストラリアへ渡りました。現地で中古車を買ひ、1年間テントや安宿に寝泊まりしながら旅をしました。

——青春の旅ですね。

竹田 二十歳の旅立ちといえますが、すごい感動がありました。毎日毎日、日が昇ったら起きて車で砂漠地帯を走り、日

が暮れてくると自分で夕食の支度をします。そういう単純な時間の流れの中で「ああ、これだな」と。大自然と人間との直の交わりの中で、自分の小ささを感じたといえますか。そういうものがはるか昔に生きた人々の心に最初に芽生えた宗教心のようなものなのかなと思っただんです。大学で学ぶ宗教には見出せなかったものでしたし、宗教と宗教心とは別のものなのかなとも思いました。だから今でも僕は特定の宗教に属する立場ではありませんが、何かにふれる度に自分の中に宗教心というものがあふれるのを感じます。

——当然、カメラを持っていたか。

竹田 はい。旅に出る前から、いろんなことに感動するだろうとは思っていました。

した。それを何かの形で残したかったし、自分の旅を貫く軸を何かもちたかった。絵でも日記でもよかったんです。そこで、たまたま選んだのがカメラだったというわけです。いちおう一眼レフを持っていたのですが、とくに子どもの頃からカメラが好きなのであればありませんでした。ただ、せっかく撮るのだからと、家の近所に住んでおられたプロの写真家から事前に指導を受けました。その方が、のちの僕の師匠というわけです。帰国後は師匠に勧められて初めて写真展を開き、3回生になると師匠のアシスタントに。その時点で将来はプロの写真家になろうと決めていました。それから卒業するまでは授業とアシスタントの仕事に追われる毎日。サークルにも入らなかったし、いわゆる学園生活の記憶は希薄ですね。だから今頃になってまた大学へ行きたくなくて、留学しているのかもしれない（笑）。

これは僕の性格だと思いますが、何でも経験して感動してからでないと動き出せないんですね。でも、感動を基盤とした行動は持久力があります。どこかで力が弱くなるのがあっても、また動き出せます。

——長江との出会いはいつですか。
竹田 96年、3回生の時です。国際日本

文化研究センターによる環境考古学調査「長江文明の探究」プロジェクトに、師匠のアシスタントとして従って行ったのが最初でした。長江流域には6000年前に巨大な稲作文明があったのではないかと、黄河から下ってきた民族によってその長江文明が滅ぼされ、ボートピープルとなった人々が日本に渡り、日本の稲作文化を作ったのではないかというのが、このプロジェクトの仮説。それが日本文化の源流ではないかというわけです。

そこで長江文明に興味をそそられ、そこで、神学部でも自然崇拜を主とする、よりプリミティブな民族宗教の勉強をしていました。97年からは正式な記録カメラマンとして毎年長江プロジェクトに参加させていただき、01年のプロジェクト終了後は、中国と日本を行き来しながら04年まで延べで1年半ほどのあいだ長江流域を旅しながら撮影を続けました。

朦朧とした「玉（ぎよく）」の
世界に惹かれて通い続けた長江

——オーストラリアの旅で得たものとは、また異なる感動があったのですか。

竹田 砂漠の多いオーストラリアに比べ、長江ではすべてが朦朧としていました。たとえば僕が最初に長江へ行った10月頃は毎日雨が降り、朝は必ずあたりが

靄（もや）で煙っています。平原には開墾された泥田と竹やぶが続く、まさに水墨画の世界。最初はそういう、つかみどころのない風景に足を絡め取られそうな感覚を覚えました。でも、却って足を踏み入れたくなかった。（笑）

——長江の神秘性に惹かれた。

竹田 長江は「玉」の文明なんです。梅原猛先生がおっしゃるには、世界の四大文明は金を王権の象徴として大切にしたけれども、長江流域では、それは玉（ぎよく）であると。白くて、もやーっとした玉の世界なんです。ぱっと目立つ派手な色ではないけれど、ずっと見ていたら引き込まれるようなね。そんな話を聞きながら長江を見ると、これは面白い世界だなあとと思うようになったんです。

僕は形にならない状態のものにとても魅かれるみたいですね。宗教とは最初の宗教心に人間の手によって形式的なものがどんどんと加味され、構築されてきたものだと思うんです。しかし一方で、現代に至ってもなお正式な経典すらもない宗教も沢山あるわけです。日本の神道にしても、もともと経典なんてないわけでしょう。ただ森に行つて木や石を崇める。そういうアニミズム的な世界に、どうしようもなく惹かれていったんです。

——子どもの頃から、漠としたものに興

味がおりだつたのですか。

竹田 雷とかね。学校にいて、遠くでゴロゴロ鳴るともう、わくわくしました(笑)。

日本の原風景を残す長江上流域

——長江流域でとくに興味深いのはどのあたりですか。

竹田 とくに上流域です。黄河文明に押された人たちが少数民族となつて、かつての稲作文明を伝えているのではないかと言われているところですね。長江プロジェクトの現地調査が上流へ進むにつれて、僕の関心も平原から上流域へと向かいました。上流域の貴州省の村へ行くと、一面に棚田があり、高床式住居が山の斜面に並んでいて、髹(まげ)を結って藍染の衣装を着て天秤棒を担いだ少数民族が農作業をして暮らしている。水牛で土を耕し、皆が一列になつて田植えをしている。また彼らは今でも山や森の木々、清らかな水の流れに神秘を見出し、崇めています。まさに1000年、2000年くらい前の日本にあつたような人の営みを目の当たりにしたんです。タイムスリップしたような気持ちでした。遺跡調査で何千年前の土器が出てくるのではなく、いま目の前に、そのまま昔の文明が日常として営まれている。これはすごいなあ

と。それをきっかけに、自然を含めてそこに展開する人間の営みに大きな関心をもち、この長江をカメラマンとして最初の仕事にしたいなと思いました。それからどんどん長江にのめりこむようになっていきました。

——日本の原風景がそこにあつたのですか。

竹田 そうですね。いわゆるムラ社会で、人々がおつとりしていて優しく、懐かしさに満ちています。きつとムラ社会の悪い部分は僕は見ていないのだと思いますが、日本では少なくなってきた「共同体」がそこにあつた。原風景といいますが、そういう世界は僕たちの世代は体験としては知らないわけですね。土門拳さんや木村伊兵衛さんの写真で「ああ、これが原風景というものかと知る程度です。でも、僕みたい現代に生まれた若者が長江の村へ行つても、何かを感じるんです。人々の表情、姿勢、暮らしがとても懐かしう感じられます。

そういう昔ながらの伝統を守る少数民族の村々を、四季に訪ねました。もつと上流へ行くと草原に遊牧民がテントを張つて暮らしています。氷河を見たくて源流域へ行つた時は、標高5200メートルの場所です。生活している人々に会いました。酸素が下界の半分以下と薄く、数十歩歩くともう息切れするような高地に人

が暮らしていたので、本当に驚きました。そんなところで暮らしている人もいれば、かたや長江最下流域にある上海へ行くと、高層ビルの林立する、あの近未来都市の風景があるわけですよ。これが一本の川で結ばれている。そこには数世紀にわたる人間の営みが混在しているんです。それもまた長江の面白さですね。

——壮なお話ですね。

竹田 貴州省に暮らす少数民族は中国ではミャオ族と呼ばれていますが、ベトナムやラオスへ行けばモン族となります。たまたま国境で分けられています。同じ民族なんです。全部つながっている。ミャオ族は、大移動したと言われる民族です。もともとは黄河の南側の地域にいたとされていて、それが北に暮す民族に押されて長江流域へ来て、さらにベトナム、ラオスの国境近くへ来て、それが20世紀にはベトナム戦争によつてポルトガルとなり、アメリカへも渡つた。自分たちの国をもてずにずっと移動を続けて、悲しい歴史をもつ人々です。

——現地ではどこに滞在されるのですか。

竹田 村では村長さんのお宅に泊めていただきます。たいいてい村に4、5人、北京語を話せる男性がいますので、言葉にはそれほど困りませんでした。寝食を共にすると、やはり親しみが湧きますね。

電気は使える家もありますが、電気代がかかるのでたいいていは使いたがりません。薪を切ってきて囲炉裏を囲む、自給自足の生活です。ほっこりして、いいものですよ(笑)。

——ご自身に、そういう生活スタイルが合っているのですか。

竹田 ずっとその村で暮らすのではなくて、そういう暮らしと都会の生活と、両方を行ったり来たりするのがいいですね。村の暮らしから、何かをもつて帰りたいです。

若い世代のためにも消えゆく原風景を撮って、日本人のルーツを伝えたい

——今後も長江を撮っていききたいとお考えですか。

竹田 はい。自分のフィールドは中国にもちたいと思っています。とくに少数民族の暮らす地域ですね。ただ、この10年くらい撮影してきて感じますが、それらの地域は今、非常に速いスピードで変化しています。政府の政策のもとで、開発のために田舎が猛烈な勢いで潰されていつている。上海でも庶民の住宅街だった弄堂(ろんたん)がどんどん壊されて高層ビルやマンションなどに姿を変えています。おそらく日本の30、40年前にあつたことが今、中国では一気に進められて

いるのではないのでしょうか。僕の滞在中も、「二村テレビ一台政策」というのがあつて、小さな山村にもテレビが入りました。髹(まげ)を結つて、今までテレビなど見たこともなかった人々が、夜になると村長の家に集まってきたりテレビを見ると、画面で携帯電話のコマercialを見るという、不思議な世界が出現しています。

——焦りはありますか。

竹田 むちゃくちゃ焦っていますよ。でも変わりゆく中で、かつての風景の掘り起こしができればいいなと思っています。長江源流域に日本の原風景を見る機会が与えられている僕たちは、まだ幸せなのではないでしょうか。日本のさらに若い人たちは、将来何を見て自分たちのルーツを確認するのでしょうか。自分たちの根っこを思い起こさせるものが、現代は本当になくなってしまいました。誰が悪いというのではなく、そういう文明システムになつていく。囲炉裏を囲んで皆が集まるようなシステムがもう、日本にはなくなつてしまった。皆が集まりたくても集まらないんです。少数民族の村で発見した、日本に足りないものをもち帰つて、若い人たちに伝えたい。そういう日本文化のルーツを写真で残せたらと思っています。

今年から新たな文明研究プロジェクト

が始まり、アンコールワット遺跡を擁するカンボジアへも間もなく行く予定です。中国をベースとしながら、アジアへの視点は、常に持ち続けたいと思っています。生まれ故郷である京都にも、まだまだ自分の知らない表情がたくさんあります。なぜ京都をもつと撮らないのかと聞かれることがあります。古くから大陸との繋がりを経ているようなものが堆積している街なので、もつと日本文化のルーツを勉強してから撮りたいですね。

——竹田さんが写真を撮る時、最も大切にしていることは何ですか。

竹田 現場、体験、想像力。そして「あつ、この被写体いいな」と感じてすぐにシャッターを切るだけでなく、対象をよく理解してから撮るという基本姿勢は絶対にもち続けたいですね。僕は被写体には個というものを超えて、風土や歴史の中で培われてきたものが必ず宿っていると思つています。だから感動を基盤としつつも、その風土、歴史を知ることで、より深くその被写体に入り込むように心掛けています。そのあたりは神学部で学んだこととつながっているのかもしれないね。

——本日はありがとうございました。

(聞き手・當村まり、2006年11月13日 大学「寒梅館」)